

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	増木優衣
論文題目	現代インドにおける清掃人カースト差別と公衆衛生 —ラージャスターン州における屎尿処理技術革新を通じた社会変革の試みに着目して—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、現代インドにおける被差別民である不可触民 (ダリト) 差別をめぐる社会変容メカニズムへの、地域の社会文化・経済・生態環境的文脈からの総合的なアプローチを試みるものである。具体的には水洗トイレの普及を通じた清掃人カーストの解放の試みに焦点をあて、公衆衛生的手段を用いた開発介入がもつ文化社会的・生態環境的影響を検討するとともに、ローカルな地域社会における清掃人カーストと上位カーストとの関係について記述し、その変化の方向性について考察している。</p> <p>第1章においてはダリト解放と清掃人カーストに関する先行研究が検討される。1960年代後半以降、おもにガンディー主義者が推進したのが、清掃人カーストを汚物への直接的な接触とそれに起因する差別から「解放する」主要な手段としての水洗トイレであった。1990年代には、清掃人カーストら自らが組織する政治経済的地位向上と労働環境改善のための運動も高揚をみた。これらの動きに関する研究には蓄積があるものの、次のような課題もある。第一に「水洗トイレ」がすでに開発された所与の技術としてとらえられてきたため、技術そのものが清掃人カースト解放という観点から開発されていく歴史的過程や、地域社会固有の生態環境に及ぼす影響が考察されてこなかった。第二に、運動を主導してきたガンディー主義者 (主に高位カーストからなる) や、清掃労働に従事していない都市部エリートが記述の中心となり、地方都市や村落部で実際に清掃業に携わる人々の観点から解放運動の展開を捉える視点は軽視されてきた。</p> <p>そこでまず第2章において、不可触民解放運動、とりわけ清掃人カースト解放運動の一環としての水洗トイレ普及運動が展開されてきた歴史的過程を、文化社会的・技術的双方の側面から明らかにするとともに、本稿が対象とするNGOスラブ・インターナショナル (以下、スラブ) を、その歴史の中に位置づけた。</p> <p>第3章では一連の水洗トイレ普及運動を通じて、実際の地域社会においてはどのようなタイプの水洗トイレ技術が導入され、それにより地域の伝統的な屎尿処理過程がいかに変化し、さらに新しいトイレの普及はどういった環境負荷につながるようになったのかについて、ラージャスターン州の地方都市T市の事例を通して明らかにした。</p> <p>第4章では、T市において水洗トイレの普及を推進していくことで乾式トイレの屎尿処理から清掃人カーストを「解放」したスラブの諸活動が描かれる。具体的には、(1) スラブの組織構造と事業形態の特徴と日常的な組織運営におけ</p>			

る問題点、(2) スラブの活動を通じて「解放」された清掃人カースト・ヴァールミーキについての組織における認識や位置づけ、(3) T市の職業訓練事業に参加したヴァールミーキの人びとの社会経済的状況の変化を検証した。

第5章では、水洗トイレが普及し、清掃人カーストの人びとが乾式トイレの屎尿処理を行わなくなった状況において、T市の地域社会における清掃人カースト・ヴァールミーキと他のカーストとの関係の変容が描かれた。ここでは特に食物授受に焦点を当てて分析が行われた。T市においてはカースト出自をあらゆる理由とした食物受け取りの拒否が憚られており、カーストの浄・不浄ではなく、清潔・不潔を理由とした接触や食物授受の制限が語られている。スラブを中心としたカースト解放と清潔化の運動によって普及した公衆衛生の観念をヴァールミーキの人々が利用しながら、日常生活の中で、他のカーストとより対等な社会関係を築こうとしている状況が描かれる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はインドにおいて不可触民とされてきた清掃人カースト、ヴァールミーキをめぐる社会的差別の変容について、公衆衛生という側面から彼らの解放を目指した試みに着目して研究を行なっている。特に野外排泄や乾式トイレを廃絶し、水洗トイレを普及させることによって公衆衛生の向上と被差別民解放を同時に実現しようとする運動の歴史と現状に注目し、地域における社会的・生態環境的帰結を探っている。カースト差別やダリト解放についてのこれまでの研究は、政治的・社会的・経済的・文化的側面に注目するものが多かった。本研究は、新しいトイレの導入という技術革新を研究の中心に据えることによって、従来の研究にはみられなかった、技術や生態環境との複雑な相互関係という視点を付け加えることに成功している。

本論文の大きな学問的貢献は、これまで公衆衛生と清掃人カーストの解放の実現を可能にする所与の技術としてとらえられてきた「水洗トイレ」について、その開発と使用に関わる複雑なプロセスを詳細に探求し明らかにしたことである。史料読解とフィールドワークを通じて、大規模な下水道施設整備がなされていないインドにおいて、20世紀以降どのようなトイレが設計され、さらにそれが様々な地域的な環境や資金的な制限のなかでどのように改変されつつ採用されていったのか、またときに予期されない社会関係の変容や環境への影響に帰結してきたかを明らかにしている。

水洗トイレの開発・普及活動を推進した上位カーストは、尿尿処理技術の革新のみによって清掃人カーストへの差別が解消され、公衆衛生も増進されると考えていた。しかし本論文は、フィールドワークを通じて地域における伝統的な尿尿処理システムの再構築を試み、水洗トイレという新しい技術の導入によって清掃人カーストの伝統的権益が失われた一方、堆肥化のサイクルが阻害されることによって環境的負荷が増加した事例を示している。トイレ・システムの転換後もヴァールミーキの就業モビリティの拡大はそれほど達成できず、かれらの清掃業以外へのアクセスが困難なままであるという精緻なサーベイにもとづく考察は、運動主体の「解放」の認識がヴァールミーキの生活実態の理解に必ずしも即したものとはいえないことを示唆する。さらに、食物授受の場面の観察を通して、尿尿処理作業からの「解放」がそのまま差別解消にはつながらない一方で、「衛生—不衛生」という新たな概念を用いた下からの交渉が日常的に現出していることも明らかにしている。

このように、本論文は社会的差別の解消を目指した開発介入について、総合的地域研究の視座から検討することの有効性・有用性を示すものであり、その学問的・実践的意義は大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と

認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。